

日本G.A.P. ニュースター
No. 4

目 次

“四盤の訣別”の概要 その3	1
オ2部 世界講演旅行	
オ1章 「米国からニュージーランドへ」	1
オ2章 「濠州」	2
オ3章 「ダーウィンから英国へ」	3
オ4章 「オランダ女王との会見」	4
オ5章 「チューリッヒ事件」	5
オ6章 「旅行の終末」	6
オ3部	
オ1章 「悪魔すなわち時の人」	7
個人的体験を通じて求道へ	10
ジョドレルバンクの神祕	13
雑報	15
編集後記	17

田盤の訣別 の概要 その3

今回は、訣別中のオニ部及びオニ部を紹介しますが、これでこの著書の執筆の進捗は完了致します。カッコ内の註は之保田によるもの、「」内は原文の訳をそのまま引用した文です。

オニ部 一 世間介講演旅行

『オニ部 米国からニュージージーランドへ』

① 一九五六年の終り頃、アダムスキとその協力者たちはメキシコ、ハリスゴのチャパラで故月の休暇をすごしたが、この間にハイウェイ近くの空室に滞在していたドーム付の巨大な宇宙船をアダムスキは16ミリの天竺巻映写機に撮影した。このフィルムは後に彼が世間介講演旅行で各国を巡歴した際に重要な資料として公開した。

② 同報記の原稿をレスリー(デズモンド)がかりつけの出版社に送った頃から、電報通信研究団体がJFの研究室に混乱を起し始めた。すなわち、宇宙人を霊的なものとみなす思想により、宇宙の整理にたいする社会的態度を妨げることになったのである。アダムスキ宛に世界から賛同状が投函するようになったけれども、それにたいする回答は書簡や電話の上から大変な仕事となって来た。そこで「宇宙人の指導により各層の協力者」を呼びかけて、アダムスキの代理として彼の同意や情義をヒトとして自国内の興味ある人々に伝達する計画を立てた。よとの旨を知らせた結果、ただちに各国に協力者が蜂起して世界的な組織網が確立されることになった。この協力はすばらしく、GAPと呼ばれるこの選

動は急速に拡大していった。

③ 一九五八年に濠州のGAP協カグループから費用むらう持ちてアダムスキに講演旅行をすすめてきた。これを契機として彼は世間介講演旅行に旅立つことになった。(註)当時、日本にも主要な目的の連絡が私宛にありましたが、残念ながらこちらで費用を捻出できず、ついにこじわった。いままががあります)

④ 一九五九年一月十三日にロサンゼルス空港を出発。途中ハワイに寄ってこの小グループのために講演を行なった。フィジー島経由でニュージージーランドに向い、一月十七日にオークランド、ウェヌアパイ空港に着陸。ヘンク・ヒンフェラー夫妻と彼らの団体が主宰してニュージージーランド各地で講演会を開催。いずれも大盛況で会場は盛況満員となった。ラジオ、テレビにも出演し、また政府機関が絶大な支持を寄せた。

⑤ ニュージージーランドに滞在中にヌアルアワヒアのマヒナランゴ管轄で土民のマオリ族の王と会見することになり、アダムスキ一行は管轄を訪れた。結局、都合によりまだは会えなかったが、一行は楽しい一日をすごした。管轄を待たせられたとき、その白人頭が飛び去って、一同の興味を引いた。ハミルトンへ空を飛ばして来た。この空が上空を飛び去ったが、それはヨネで一行を護衛しているかのようであった。この現象は他の機会にもしばしば見られた。

⑥ その後一人のマオリ族婦人がアダムスキに誘ったと云ふことによると、数名のマオリ族の少女が同遊したと云ふ事案があるという事であった。アダムスキは講演でこの話をわけ加えた。するとニュージージーランド・ヘラルド紙が、アダムスキはマオリの恋説である。目世間の女が口々に聞する物語を繰返したのだと攻撃したが、これは誤った攻撃であった。

◎ ニーゼーランドの一研究グループのリーダーであるW・ミラー氏
 が夫々及友人のN・ウェスト氏と共に、アダムスキがナヒアーに向う
 前に別荘を築いたあと、ロトルアの夕水湖畔の上空で数十機の円盤群
 が空けて飛舞するのを目撃して、この事件は新聞に報道された。また百
 名以上のゴオリ人を含むロトルアの多数の住民もヌアルアフヒアとハミ
 ルトンのあいだで二機の円盤が飛ぶのを目撃したという噂が流れた。

◎ 二月五日、ニーゼーランドの教皇を接待したアダムスキは市のポー
 ルで講演会を開いたが、夕方前に一牧師とその信者が町の上空を巨大な
 宇宙船が発ぶのを目撃して、町の大評判となった。市民たちは宇宙船を
 見んものと再現するのを待ち望んだ。

◎ 続いてニーゼーランド南部のクライストチャーチへ渡り、各地で
 講演会を開いたが、いずれも大成功を収めた。ティムラーでは政府が援
 助してくれた。

(註) 総じてアダムスキの世帯旅行では、このニーゼーランドが最も
 遙かく彼を迎えた国であることと強調して、この章の終りで彼は次のよ
 うに述べています)

「ニーゼーランドにおける私の講演旅行の成果はすばらしく、各方面
 の協力はたいしたものであった。二億五十万のニーゼーランド国民は
 心が開かれていて、人生の珍しい出来事と見做していているようである。私が
 もし若くて新しい住み場所を遠くとなれば、私はニーゼーランドを選
 ぶだろう、と思う。この国には多くの好機会があり、住民は友好的で親
 切である」

『第二章 濠州』

(註) 続いて濠州へ行きますが、二二ではかなり攻撃されて多くのトラ
 フルが起ることを述べています。それについてアダムスキは章の始めに

次のように述べています)

「濠州の名新聞社は私がニーゼーランドで起した反響を驚いたので、
 大抵の新聞社は私の講演を好意をもって報道していた。加うるに円盤・
 宇宙船問題に関する限り、神秘主義と電界通信との虚偽性を私はくり返
 し指論してきたので、以上のことはサイレンス・グループ(註) アダム
 スキを採録しようとする雑誌のグループ)にたいする主な挑戦となった
 のである。彼らグループは濠州における私の講演を中止させようとして
 いるらしかった」

◎ シドニーに着いてからただちに新聞記者会見が行われたが、大抵
 がアダムスキの説明をゆがめて発表し、なかには彼が金星と火星に行っ
 たと称しているというデタラメな記事を書いたものもあった。

◎ シドニーのUFOグループは賛助を用いてアダムスキを失脚せしめ
 ようとした。すなわち、濠州へ入国した外国人は如何なる仕事を行なう
 場合も政府の許可証を必要とするのであるが、グループはその必要のな
 い旨を主張して、アダムスキを政府との紛争に巻きこもうとした。アダム
 スキは不潔講演を行なうことを拒否して事態は険悪になったが、ついに
 許可証を得てシドニーで講演を行ない、市民からは大歓迎を受けた。レ
 カレ検閲局は意地悪くアダムスキを追求した。

◎ アデレードで二回目の講演を済ましてホテルの外へ出たとき、一行
 のなかの婦人連が上空を数機の円盤が発ぶのを目撃した。

◎ アダムスキがアデレードを出発する前に、宇宙機の着陸事故が発生
 した。これは三月二十八日のサンデー・メイプル紙に発表された。

三月十三日、アデレードの北東十九マイルのパーノング郡に巨大なデー
 ム型の機体が跡象から離陸するのを二人の住民が目撃したという。大体
 この数週間、多様な二帯びた円盤群がパーノングの上空を飛んできい

の存在を認める一人であるので、内心ではアダムスキに友好的であつた。ただ天文学者としての立場から表面上二心アダムスキに反対せざるを得なかつたのである。

○四月二十二日火曜日にケンブリッジ・ウエルズでの講演会は去冬學大連のダウディング卿が主宰したが、ここでも政府の許可証が下りず、向連に於てアダムスキは該講演を断固拒否したため、ついに賛意なき形で見かねて終了した。

○一日ロンドンに帰り、四月二十五日にウエストン・スパー・メア一の講演に於てためアダムスキ・レズリーと傳講場へ行き、多角してあつた。そのコンバートへ入ると、すでに先客が一人座つていた。海軍が参連してまもなくこの先客が海軍少将であることがわかつた。彼は英海軍で一等少将として働いてゐる人であつた。講演会は大成功であつた。ロンドンに帰つてから四月二十八日にキャクストン・ホールで講演会を開き、二十九日にはバーミンガムで講演会を開いたが、ここでも海軍少将が参連して待たれた。続いてマンチエスターのワックマン・ホールで講演会、これも大成功であつた。英海軍ではその他海軍少将も参連したが、スウェットマンの雲い気候のために、アダムスキは講演会を断固拒否してしまつたため、殊りの講演は中止された。

『オランダ王、オランダ女王王との会見』

(註) アダムスキがコリアナ女王と会見した当時、世界のRFDの研究家やジャーナリズムのありだてであるのひとひとアダムスキが送られて、事の真相を知つたに私を疑はれた記憶があります。以下はアダムスキが自ら述べている自分の被検の概要です)

○オランダの政取りをすすめたのは、オランダのGAP協力をレイドクウラ女史で、アダムスキがまだブリスベンに滞在の中にその旨

を連絡して来た。ロンドンにいらぬので、各国の新聞はこのことでデタラメきままる記事を發表し続けたが、なかには正直な報告を載せた新聞社もあつた。

○五月十六日、アダムスキはテレビ番組に出演の後、ハーグへ真夜中に到着した。十七日は一日休養。十八日の朝、宮廷に召まわしの車に出て、午前十一時に宮殿へ到着して文庫へ案内され、ここで女王、皇太子及び他の出席者すまわち、オランダ航空協会会長C・コルフ氏、オランダ空軍総長H・シャーパー中将、航空医官の専門家、ユトレヒト大学のヨンゲブレック教授、アムステルダム大学のロイ教授らと共に会談した。雲気は友好的で、レカシがアダムスキの体験談に非常な興味を示したため、四十五分間という制限時間が完了三時間間を続いたのであつた。

その間、質問答へは行はれぬ、女王は終始熱心な態度を示した。王宮を辭してからハーグでの講演会に出席し、記者連から会談の内容を聞かれ左が、アダムスキはただ一言「女王から先に話し出すのが、女王の名譽なので、自ら語り出すだけで、会談の段階には触れなかつた。記者のなかには、皇宮を訪問するの機会を握り逃したのもあつた。とにかくコリアナ女王は知能と愛に満ちた偉大な婦人である。

○ホテルへ帰つてラジオ放送により、ソ連が月の地表の性質についてそれが火山灰でなくて地球によく似た花崗岩の層から成つてゐることや、月の裏側に植物のように見える緑地帯を觀測したという報導を聞いてアダムスキは大いに驚いた。これは彼が女王に話した事柄を確証するものであつた。しかしそのときはソ連がどうしてこんな知識を得たのかわからなかつたが、後にクックの象稿を書きつてゐるあたりにならうとロケックトで探知したらレカシが判明した。

○五月二十二日、金曜日にアムステルダムの市立劇場におけるイタリ

ア映画の死は大気圏外から来るの試演会に出席した。この映画の筋は次の通りである。地球の象水爆によって空間に吹き飛ばされた石屑が集まって巨大な小惑星となり、ものすこしスピードで地球へ直進して来て衝突しようになり、大破壊をもたらそうとする。各国の科学者は世界中の軍隊に空爆ミサイルをその小惑星に向けて一斉に発射するように要求し、かくてもともとの惑星を作り出したのと同じ惑星によってついに破壊されるのである。この映画のあとで、新聞社の代表連からこのよういふ事が實際に起きるかと同受けてアダムスキは「起きるかもしれない」と答へ、次のように説明した。

「宇宙は真空の放電のすさまじい熱によって融合する目に見えない物質の微粒手から発生する。地球の大気の上層に吹き上げられた数百万トンの石屑が集まって人工的な小惑星になるのは全く可能なことだ。その石屑の質量が大になればなるほど、付着する微粒手群にたいして大きな吸引力を持つことになる」一九五九年八月にメキシコで発生したあの大地震の直前に巨大な火球が山中に墜落した。その他地球に墜下する火球のなかには、石屑と同様なものである。

「オオ五音 子ユーリッヒ事件」

(註) アダムスキが世界旅行中に最大の恥辱を受けた子ユーリッヒの講演会の妙事事件についてかなり詳しく記されてあります)

◎ 五月二十三日、アダムスキは汽車でオランダからスイスのバーゼルへ到着した。(二)にてはスイスのGAP主宰者ルウ・ツインシュターク女史がすべての面倒を見た。五月二十六日に子ユーリッヒで生ずる一回目の講演会を開いたが、これは大成功であった。しかし聴衆のなかにサイレンス・グループの手先がいて、講演会終了後にアダムスキとルウを牢レヒゴうとした。これが最初の抵抗であった。続いて子ユーリッヒの

警備隊長がアダムスキの実写フィルムを個人検閲を要求した。許可証を持つて多くのに、これは妙な事であった。講演会の朝、ドイツの週刊ニューズ誌「デア・シュピーゲル」の記者三名とインタヴューしたが、同誌は後に会談の内容をほぼ正確に掲載して大いなる喝采を自注を弄した。五月二十九日に向題のオ二回目の講演を子ユーリッヒで行なった。このとき警察から私服の警備隊が会場へ入った。七〇〇人の聴衆にまじつて三〇〇人の学生が入り込んでいた。始めはよかったが、巧妙な作戦のもとに次々に学生たちが会場で騒ぎだして、ついに大混乱に落ちついた。学生が聴衆と乱闘を始めたために警備隊の活動を要請したが、場内の警官隊は知りぬ顔をしていた。学生群は三伏のラッパやその他の道具を用いて騒ぎ、放散し、歓声をあげて野次り、ついに花火やカンシヤク玉を燃やさせて混乱は極に達した。映画が始まると今度はスクリーンをめぐらしてサーチライトを照射して映画の妙事をした。映画が半分まで進んだときに投げられたビール瓶が演壇に「二」婦人の肩にあたった。警官が場内灯をつけたために映画は中止され、会は終りとなった。アダムスキが会場の裏口から逃げ出して、或るカフェへたどり着いたとき、学生の一人がついて来て謝罪し、扇動者が別にいることを告げた。後になって、大乱闘を演じたこの連邦工科大学の学生群を扇動した主謀者が別にいることがわかった。またこの事件について翌日スイスの大新聞は完全にデタラメな記事掲げて、最も活躍したのは子ユーリッヒ警察だと書きたてた。

◎ その後アダムスキは健康を害して肺病となったためにヨーロッパ各国の講演会は中止された。(註) 当時伝えられたような、彼が子ユーリッヒで失敗したために、難を恐れて中止したという説は誤まりのようです。各国GAP協力者は続々バーゼルへやって来た。ドイツ、F.O

研究家長カール・ファイト夫妻、オーストリアのドラ・パウエル女史、
ミニーニツヒのゲオルグ・ナイトハルト、イタリアのアルベルト・ペレ
「博士」らである。アダムスキはロカルンで休養することになった。

◎ 世界の金融の中心地チネリッヒはサイレンス・グループの國際的
根拠地である。金^{かね}というものの影響力を及ぼす自に見えない手綱^{てづな}が各
國の國庫を動かすためにチネリッヒから伸びている。スイス銀行は
各國の政府筋を踊らせている。

◎ 「ジネネーヴ」という所はスイス人が「大財閥」と呼んでいる者たちの
増えにしたがって各國代表が互に駒として勝負をさせられて行なわれ
て居る。ゆえにスイスでは戦争を起してはならないのだ。社会の表面か
ら見られている世界政府の如きものがあり、金權の大君主たちは金の力に
よって、大衆が知識をたかめて向上するのを抑制するのである。要する
にスイスという國は中立の美名のもとにサイレンス・グループの饗食^{きやうじ}
國なのである。また世界の心靈主義や神秘主義のグループがUFO研究
界に混乱を起すことにより、間接的にサイレンス・グループを助けてい
るからである。

『オオ六音早 旅行の終末』

◎ 一九五九年六月十二日にルウ・ツインシュタークに付添われてアタ
ムスキはイタリアのローマへ出発した。空港でイタリアのGAP主宰者
アルベルト・ペレゴ博士とこのグループに迎えられたが、講演会は中止
されていたので、アダムスキは一行と共に市内の見学をせめて楽しい
三日間をすごした。十四日に小人数のゴッヤかな、ディナー・パーティー
がレストランデ・ラ・キステルナで開かれた。パーティーのあとで一同
は待降をせらつりて、大通りへ出たとき、真夜中であつた。タクシーを

拾おうにも一人も見当らない。このときアダムスキはテレ・パシーにより
タクシーの来ることを感知してその場を去言した。するときはもなく突如
一台の車が直つて一同を乗せてくれた。運転手はアダムスキが米國人
であることを云ひきて、海邊から船方まで指図をドライバーして上、
その料金をこつとらひかた。この驚くべき親切な取扱は運転手の
正体についてはその後三章の「オオ六音早」である。

◎ ローマではアダムスキの講演会が行われなかったが、ペレゴ博士
の講演会が開かれてアダムスキも出席し、産案から熱烈な大歓迎を受け
た。またローマの他の一人の協力者フランセスコ・ボリマーニ博士はシ
ヤーナリストで各國の政界の裏面に精通して、アダムスキに
数多くの隠れた政界の財産話をしてくれたが、これによって結局大衆が
真相にたいては如何に盲目にさせられているかを充分に知るこゝができた。
短時日ながらイタリアは忘れがたい印象を与えた。

◎ 六月十七日にデンマーク行の飛行機でローマを出発。コペンハーゲン
で乗り換えて、グリーンランドとカナダのウイニペックで燃料補給。
サンディエゴに向かい、米國のパロマーへ帰って波瀾に満ちた六ヶ月の
世界講演旅行は終つた。しかしサイレンス・グループははたも妨害を続
けるかもしれない。(註・最後に次のように結んでいます)

「一つだけ確かな事がある。すなわちサイレンス・グループの手のなか
にある最も強力な武器は、一般大衆の無関心^{むかんしん}にあることだ。この地球の國國の遊樂舞に友好的な人類が存在する事実に関心をもちぬ
くは、利己主義者側に最も容易に逐わされており、はからずもサイレン
ス・グループの道具として役立っているのである。」

(註・以上でアダムスキの世界講演旅行に関する部分は終ります。現在は
はたいぶ状況が変つていきます)

『オ一章 悪魔すなわち時の人』

(註) 二の章は實に素晴らしい、アダムスキのこれまでの記述のなかで最大のものである。すなわち彼の宇宙哲学を最も端的に表現したもので、その見解は文章が詰りまわって、まさに、訣別の最後を飾るにふさわしい。これは怪談記ではなくて、或る架空の人物三名と一人の不思議な対話形式になっており、五名は社会の各層を代表する人物で、要するに理論力なき地球人の象徴であって、見知りぬ神話とも、悪魔人を表わしているようにです。著者の註によりますと、二の章は一九三七年に小冊子として出したもので、現代の情勢に合わせたため書きかえた箇所があるという事です。これこそぜひとも全訳して紹介したいのが、紙面の都合で無理しか書けませぬ。また註中に述べたのは、私の翻訳力と文章が貧弱なため、それに代り成りあることなどからして、原文の道力を二二では別紙伝えているという事です。

先ず最初に、宇宙の神と悪魔ルシファー(註)ルシファーとは人間の幽体の神の象徴です」とか云々たる宇宙空間で高登を行なうが、神の宣告によりルシファーはついに天空から落下して地球の凶人となる。しかしルシファーはあくまでも宇宙の神を嘲笑して次のようは宣言を放つ。「地上の人間の忠誠を期待する、おお、悪魔の神、悪かしの神よ。ここでわれは人間を支配して、権力を宇宙天とを身につける方法を汝のこの幼な児たちに教えるであらう。」

一九六〇年の春まだ浅き頃、或る有名な山の茶屋の休憩室に、俗世間を遊がれ、憩いを求めてやって来た五名の人々が座っていた。すなわち大家業家若し、理髪師、有名な老教師、一科学者、工場の簿記係である。夜は更けて一同の会話は窮乏え、しほし静寂が室内に満ちて来た。すると突然、懐れみを遣えた音が聞こえてきた。「知りもしない理解もしてない或る力によって束縛されている哀れ奴隷と化した人間たち——」

驚いて一同が振り向くと、一人の見知らぬ男がいつのまにか室内に入っていた。奴隷という言葉に皆が聞き返すと、彼は、現代の人間を奴隷化させて支配している者は「悪魔なので、皆さん、悪魔を時の人なのだ」と静かに説き始める。悪魔と聞いて皆はこの男が教師が何かで、古臭い神話に出て来る悪魔の姿をしたような者のことを云っているのだと思ふ。男はそれを否定して次のように語る。

「私が云うのは一つの力——今日の一般人の心を支配している攻撃的な力、無数の人間の心を通じて発現するうちに擬人化されるようになった力です。悪魔として現われている利己主義と貪欲の力は、人間がそれこそ人物として容易に口には得るほどに、人類によってなく表現されるようになったのです。力にたよりる欲望、個人的満足、おまが宇宙天などは、人間のなかできわめて大きくなっていますので、人類はその天賦の生得権を構成するあの宇宙的特性を次第には失っていきます。人類は悪魔の監督の鞭の下にあがき、あぶら汗を流し、喘いでいるのです」

先ず老教師が口を開いて、背後に神をもった社会の宗教的要素が悪魔的な力に打ち勝つのだと反駁するけれども、見知らぬ男は、教師などというものは次第には皆悪魔の使徒なのだと言えて、これまでに教えられ

「キリスト教は、理念の自由の正しさにたいする抑圧の象徴なのだ」と説く。

「神は科学者が口を出して、科学こそ人類を救うものだ」と駁論を述べたが、少数の真実の科学者の意見を引用しようとしている人が多いため科学でさえも自分たちの神を一時の力として起る人類を救うことはできないと見知らぬ男は語って、次のように云う。「——人類は知識を求めていゝすが知恵を求めてはいません。知性的であること、知能の働きを支配するためにそれを賢明に應用することは別問題です。現代の人間は心理的に幼児であり、知能的には巨人です。この二つがうまく調和していません——人間は生命と死の秘密を知るかも知れないし、生き物に息を吹き込ませることもできるかも知れない。その生き物から恐怖、利己主義、嫉妬、苦痛、貪欲、情欲などを取り除くことができるでしょう。か。人間の知能に完全な支配の能力を吹き込むことができますか。できはしない。それは多量への信託です——誰も自分以外の人間の性質を変えることはできないのだ。それをやる方法を教えてもらうことはできませんが、レカレ人間の道徳的、心理的な向とを導くことが個人的責任にすぎないが、それがやる方法を教えるでしょう。法則を應用しているというのに、一体どうしてそれがやれるでしょう。次いで男は、かつてこの地球に存在したレムリア大陸について説明を始める。このレムリアは太古に地上の楽園として栄え、テレパシーで語ることでできた住居は雲霧の境で互に暮らして居て、科学の発展もその極盛期したが、いつの間にか悪魔が、すなわち自我を知る心が芽生え始めて、人々は互を愛せしむようになり、貪欲と争執にあぐらよつた。

男の説明に続いて、一同の意識のなかに古代のレムリアの光景が浮か

あがって来たが、それはすでに末路を歩み途であった。年月が肉光の如く過ぎ去った。夏日月が過ぎ去って、続いて記憶のフィルムが容易にたれることのできない或る場面でハタと停止した。誠実にして謙虚な一人の導師が一群のレムリア人の朝の瞑想を終わっていた。「目を開け、一大精霊のまたたきよ——汝らが自分自身とこの土地とを互に破壊せざる前に、この破壊的の力の方を汝らの心から取り除け。この七カ月のあいだ大地は震動してきた。物質的時間を得ようとしている。物質を汝らに扱かせぬように注意せよ」しかし目覚めたレムリア人たちは嘲笑して立去るだけだった。やがて大地は激震が起り、大津波が発生してこの大陸のすべては海に帰した。二にて悪魔は、宇宙意識の神に向って勝願の言葉をあげるが、神はただ静かに云う。「私は待とう。ルシアアよ、彼ら幼い児が自己の自由意志を汝のものへ帰すまで——私は待とう」そこで悪魔は固に秉って片づはレカレ利己主義、貪欲などの毒の歯を地上の人間にはらういた。

アトランティスなる高度に進化した大陸があった。二もかつては、汚れを知らぬ美しい楽園であったが、ついに拜金主義に墮して競争が生まれ、分裂が発生した。すると、やはり一予言者が警告を発した。「黄金の神を捨てよ。黄金の自欲を取り返せよ」。レカレ金儲けに熱中したアトランティス人はこの言葉は耳も借さなかった。やがてアトランティスも消滅した——自然の手によって排除されたのであった。

続いて、男の若は去てエジプトの説明へ移る。この国も初期には互を愛と相互理解で榮えていたが、次オに宗教上の紛争が起り、四百五十年にものぼる相手を各神族が一体の信奉せんものと、ついに種族間で死闘を始め、やがてエジプトも宗教的偏狭と迷信の墓のなかに没してしまつた。

「意識の裏めくられて、今度は血の渴望と残忍な奮行のモチのなかか
らローマ帝國が勃興する。——軍部独裁による疑わしい曙光のすべて
に包まれたローマ、刺し通す剣で刃を敷かれ、ローマ人の聲が響いて来る。
三人衆の周囲の上に、静かな備れみを湛えた一人の聲が響いて来る。
——あなた方が何事でも他人からしてほしいと思ふことは、他人にも
そのとやうにせよ」

「だが人の身はソノホマで目には賣いて、心は石のようになつて来た。
古代ローマの歴史は歴史の一面にすぎないので」と男は話してから、
彼は現代の物質文明が破滅のフタにあることを説く。ところが五光の若
は二の男のそのことがどうしても理解できなくて、次々と懇切な質問を
尋ねては男をやりかたぬものとする。見知らぬ男はこの一斉射撃の前に黙
然とうたがはれて、やがて靜かに口を開いた。

「皆さん」彼は語り始めた。「私はあなた方に人類の過去の謬ちを表現
してもらい、それを皆さんはうまくやりよれた。あなた方各人の考えは
ちやうど過去の文明がやつてきたように、極端に個人的な表現形式にな
つてしまつた。宇宙の法則に反するたうから、私は如何なる分野でも
あなた方のやうな進化の正しさを否定はできない。ただ私が云うのは、進
化というものは個人的利益のかわりに公益に向けられねばならないとい
うことである。私の意味するところは、あなた方が他人からしてもらいた
いと思ふことを他人にもしなさいということ、あなた方の心の石字の
ほかに他人を擲ちてゐるようなあの親切の感情を皆さんは表現してゐる
といふことだ。それで、もしかりに私があなた方からあなた方の神を
取り除くとすれば、私はそのかわりに万人にとつて等しい非個人的な
創造者を与えたい。——善悪、正邪のいづれを知らぬ創造的な力
すなわち「自分でまたした種は自分で刈られねばならない」という因果の法

則、人生のあらゆる面での完全なバランス以外に人間から何物をも要求
せず依頼もしない動一行動の原理を——」

一同はこの言葉が理解できぬままにその場を去つて行つた。室内の暖
炉の前で見知らぬ男はただ一人で座つていた。「哀れ、奴隷と化した人
向たち、私が業霧から解放してやりたりのはこのようは人たちの心に
立ち、こ行くあの薄世の人々から安んずるがままに生きてきた。その若の調
子には驚かされたような嘲弄の響きがこもつていた。

「続いて静寂が——しんしんたる静寂が満ちてきた。その深い静寂の
作用そのものはなかで、それはあらゆる意識の空殻をさかき消すやうで
あり、しかも一つの想念の印象を与えるやうにも思われた。——古い
古い一つの想念「私は待とう、私は待とう」——。

『オニニニ 結語』

(註) 談判中の最後の章としてオニニニでカダムスキは絶望的な言葉の
やうに述べています)

「私は二の書が同盟・宇宙人同盟に関する読者の疑問の多くに答へ、ま
た二の探求の分野における私の立場を明らかにしたと心から思うもので
ある。

空飛ぶ同盟の到来とともに始まつた私の予備研究は二巻を終つた。もち
ろん、このことはその同盟を放棄したことを意味するものではなく、技
術的、哲學的は線に沿つたより高度の知的な深處に在りする新しい討議
が私と仲間とによつて遂行されることを意味するのである。宇宙の兄弟

によつてわかる与えられた知識は今や活用されねばならぬ。私は、我々
の進化にとつて絶対に必要な二つの分野——宇宙哲學と科学——を進む
やうにと忠告を受けてゐる——後略」

(註) 以上で、談判の紹介は終ります)

ルシー・マクギニス女史からの便り……

個人的体験を通じて、木道へ

一月七日付のルシーより各方面より私に送られたが、これは
父がアダムスキのことを離れた理由について詳細を知りたいと
いう私の依頼にたいする回答で、これで彼女の気持ちが体明らか
にされていふと思われまゝので、重宝を重宝として全文を次に掲
げることになります。

＊

昨年十一月十日付のあなたからの復答に出るべきお手紙に返事が遅れ
たことをどうぞお詫言下す。私はそれまで黙っていても深く、また
あつたが等々を記してゐるのを嬉しく感じました。私には三十八にな
るまでが有り、他の息子は三十二です。今私はあなたについて思いを
めぐらし、私の息子の一人のようにあなたを愛することかできます。
あなたには九才から十二才までの三人の息子が有り、弟息子のほうには十
七才に女と腹直いの同年の息子が有ります。弟は若いときに結婚し
ました。長男は結婚するまでにより、長い体験と成熟を待たのです。
あなたには子供さんがおありですか。あなた自身も大家族についてもつ
と詳しく知らせてくださいませんか。

あなたが必要を困難に思ふことはよくわかります。東洋の多くの言語
は別として、多くの理由から、英語は學ぶのに最も困難な言語の一つと
考えられてゐます。私も多くの言語を知るのは賢明だと思ひますが、何

も知つてはゐません。スペイン語を少し勉強したことがありますが、マ
スターしませんでした。しかし私たちが互の言語を話したり理解できな
りすれば、国家間に平和を確立することに、これより機会があると思ひま
す。

あなたにたいする態度は非常に親切です。いつまでも変わらぬ友
情をどうもお礼言。この過去三つは私にとって多くの教訓の一つ
になりました。それは多くの英の役立つことになると思ひます。それが
人生の目的ではないでしょうか。自分は一んなことを信じてゐるのだと
公言してゐる物事に如何に一生懸命に従つてゐるかを感るために、自分
自身の内面を覗き込ませようとして自分の生活へ次に何がやつて来ようか
は誰にも念及められないことですね。しかしとキミを覗き込むのはよい
ことです。あなたの友人たちがアダムスキにたいする不信のために、あ
なたから去つたとき、あなたは喜びの試みに合いました。しかし信
頼し得る新たな友だちがあなたをとり囲んで居てくれます。私がアダ
ムスキを離れたことで、これまで親しみを感じていた人々（彼、各国外
の者のなかの或る二、三の人たち）が私に示した態度を喜ばせまし
かし私はその人々を非難してゐません。（註。ルシーを非難して、彼
女をアロ網から除外せよと主張した協力者が少数いたことを意味しま
す）彼女は理解してゐないだけのことです。長いあつたアダムスキの
ためにやつてきたように、私はもうこれ以上他人のための代弁者になる
ことはできません。また私は導師たる資格もありません。私は個人的
体験を通じてもっと知恵を得る必要があるので。そのことを私はせろ
うとしてゐるのです。それは他人を指導者として頼ることで満足できま
せん。むしろ個人の努力、愛、誠意、信念など、成就されるにちがひ
ないのです。私は精神病患者でもなければ信物治療家でもなく、また私

の内訌に私が求めるものになりしる解答の多くがあると思いません。

私は他人の言を聞くことはできませんので、そうして行きます。しかし周囲

の自我をこそよく知るための実行と深い欲求からのみ来るところのあ

の内訌の確信を私は持つ必要があるのであります。……推論するよりもも

っと高い濃度から来る印象に気づくために……。私が個人的体験を

通して知悉を得るときには指導者としての資格を得ることになります。

あれはアダムスキと私の両方のために御自分の心のなかにも他を隠し

てしまふが、これはほんとうに自覚している。私は正しくいふもの

をしようとは思いません。重要な生々方と私たちに与えられてきた知識の

支配の仕方について私が知る限りのベストを尽くそうとするだけです。

昨年八月あなたに差上げた私の手紙をあなたは再プリントして行きます

が、(註)ルーシーからの手紙の一部をコピーして各関係者へ送った

二と三を意味する)私に言ふかといふ緩めをわかつたことに気づいて、随

分残念に思っています。あなたが引用した私の文章の才四行目に、「そ

うすることによって彼は(註)アダムスキは(古)東縛された諸理論の

くならたり、どうして所運落く書いて驚恐して下さい。あなたからの私信

を受けとるのほどでも嬉しいのです。

御存知でしょうが、我自身発する遊星の合々は、時々近づくにつれ

て次第に興味をひきこめて行きます。私は科学者、天文学者、占星家など

の報告を聞いてみますが、二万五千年にこのほつて歴史的な記録があ

りませんので、期待すべしなものであります。彼らの声明は臆測以外の何物

でもありません。何か発するものがまた待って見よう他に仕方がない

と思ひます。また私は世界中の現象が突然に特別な興味をもちています。

現象の証を解く方法を知りさえしたら、発するべき事柄や場所などにつ

いて、それが何れかのしるしをしますかもしれません。と同時に、私は知

識を攻めながら、私の生活を添わして居る多くの祝儀に感謝しながら日々

を生きて居ります。三月にはこれはこの合々が私たちの遊星にとって如何

なる影響及ぼしたかがよくわかるでしょう。またこの太陽系内の他の

遊星全部が如何なる影響を受けるかを知ること面白いでしょう。きつと

与えられるものであると私は聞いています。たゞん解者のすべては今手
のなかにあるのでしようが、心を静めて聴きとる術を學んだ人が殆どい
ないために、その無事を説きとることができません。私は長いあいだに
それを學んでくるべきだ。たのですが、寔にどうではありませんか。あな
たは如何ですか。私はその問題で努力してはいますが、進歩はカタツマリ
の進歩よりも進いように思われます。それは忍耐力を必要としますが、
それを私も堅固にせようとしてゐるわけです。

今こちらの南アメリカは昔は暖かい氣候ですが、レカレトモ
おり近年には海峽や東地の谷間に霧がたちこめまゝ。こちらではとても
雨が必零なのです。また他の地域では暴風雨、豪雪、大雨、みぞれ、雹
氷などの害が家々つてります。穀作によりまると、ヨーロッパと英國諸島
もひどい又度ださうですが、他の國からの穀物がありません。アシア
の多くの地区で戦争が起つてゐることを聞いていますが、しかしこれは
人工的なもので、同時に、人間が互に相手にたしする現在の態度を
変えなければ、戦争も危険な状態になるかも知れません。しかし象状
況については報告がありません。それをこちらのほうの状況を知らせて
下さいませんか。

一月七日

ルーシー・マクギニス

*

以上の文面からして、ルーシーがアダムスキのものを離れたのは全く
彼女個人の意思によるものであつたと思われまゝ。つヨリルーシーが非
常に賢明な人であるために、そうした要件にあらがちな程に独立意識に

よつて、個人の体験を通じての自己探求を志したのではないかという臆
測です。アダムスキを決して否定してないばかりか、むしろ、同輩
の内容を依傍として重視し、宇宙人に期待を寄せている彼女が、簡単に
サイレンス・グループに誘惑されたとは思えません。レカレトモがこ
のような結果になるとは彼女も予想しなかつたことではよつ。どのよう
に考へてもルーシーの離別は個人的求道問題にはかならないし、かえ
りません。このなるともはややむを得ないこととして、ただ人間の心の神
秘性を感じさせられるばかりです。シヤカが玉言を述べたのは全く彼
の心に生じた。未知なるものへの憧憬がそつさせたといふか云いすう
がありませんが、人間のこの自動的な不可思議な致事こそ問題とされる
べきものではないかと思つてゐます。

ところで、右のルーシーの手のなかに遊星の合々に關する一節が
あります。これは今年二月に發生する天象上の珍らしい現象で、海外の
UFO研究者や心霊研究団体などでは、この合々を機会に地球に天象
変が發生するといふ説がかなり流れておりますが、アダムスキ側は同
否定してはいますので、次にC・A・ハニー氏が彼の二ニースレーター
質問にたいして回答してゐる箇所を掲げます。

向 一九六三年二月に遊星群が合々になると云われてゐる
天象変についてはどうですか。

答 これらの空想的な予言の殆どは心靈的な現象から来るもので、事
實として信じ難いものです。これらの現象のなかには宇宙機の大
量着陸から世の終末に至るまであらゆる予言をしてゐるものもあり
ます。私は異常な出来事を何も期待してはしません。眞實の宇宙
人は一定の時日に物事が起るとは言いませんし、何かを行は
つと約束もしません。

ジヨドレル・バンクの神秘

— ソ連天文学者の驚くべき告白 —

この物語は一九六二年五月二十一日にロンドンの「サンデー・タイムズ」紙に掲載されたニルス・始まる。すなわちジヨドレル・バンク電波源は遠東ソ連の金星ロケットに搭載された非常送信機から発信されたと思われる信号を受信したというのである。計算によるとこのロケットは金星から六万マイル以内を通過していた。これは昨年三月十二日に打ち上げられたが、三月二日にモスコワは、主送信機がたぶん流星と衝突したためには電波源がト絶えたのだらうと發表した。そこで前記のジヨドレル・バンクの音調は全く興味をよび起し、このニルスは殆ど世界各國の新聞に載せられたのである。

この音調の正しさを証明し、ジヨドレル・バンクの科学者はその信号が正しさを証明するに困難なまことに驚愕していることを忘れてはならぬ。彼等は電波を受信して、信号は保証されなかったが、ジヨドレル・バンクはその信号を全く受け止めたかまのつあつたを感じたにちがひない。この信号は、母音音とそれをテーブに録音してそのコピーをソ連へ送ったからである。

ソ連も感した

ソ連がこのテーブ録音を聴いたとき、彼らも同様の印象を受けたにちがひない。もちろん専門家は信号がどこから来たのかを決めることは

できなかったけれども、彼らはその通信が非常送信機に使用されるコードに似ていると考えたのかも知れない。その結果、ソ連の女流天文学者、アルラ・マセヴィツナ教授は、英国へ来て直接に自分へ聴いたらどうかというジヨドレル・バンクからの招待に応じることに決めたのである。

六月十六日にロンドンの「タイムズ」紙はこの調査の結果について詳細な記事掲載した。「宇宙探知網の女流指導者アルラ・マセヴィツナ教授と、金星探検計画の権威ボタレフ博士の二重内装は、ロケットは進路をそれて、地球からの信号に答えていた」ことを確信して土曜日にロンドンからモスコワへ帰る予定である」送信機の位置を正確に知るために、ジヨドレル・バンクは、地上命令の方法で金星ロケットと連絡を試みようとしていたソ連の科学者に協力したのである。

更にタイムズ紙の記事は、ロケットが進路をそれた理由についてマセヴィツナ教授の説明を引用している。記者会見の席上、次のようなきわめて重大な発表が行われた。

すなわちロケット内の送信機は五百おきに九十分間信号を送るようにならされたものとマセヴィツナ教授は説明した。この信号とというのは十七分間の変調された信号と科学上の情報とを伝える十七分間のコード信号とから成っている。ジヨドレル・バンクが受信された信号はこのコード信号とよく似ているが、それは地上で受射されたものがあるにちがひない。たぶんその地域のアマチュア無線家の出した電波で、望遠鏡が地上線に向って一杯の角度に傾けられたときにその信号がキャッチされたものだろう。ところがマセヴィツナは金星自体から無線信号が受射されたのかも知れないという説を完全に認めたのである。

タイムズ紙のこの記事を讀んだあと、フライイング・ワーカー・レウ

ニ、この後編纂長はジョドレル、バンクの海外隊長へ電話をかけたが、
「レ、レ、レ」の音の来たとは云わなかった。編纂長が発した最初の質問は
次のような内容であった。「つまりあの信号が人工的のものであることは疑
いがないというのである（すなわち自然の要因によるものではない）。統
く質問は、地球という電波伝送ドレル、バンク地域とは別の地方
を意味するものであることを確かめた（すなわち、この地球のどこかか
らというのではなく、マンチェスター方面の或る電信局からというニヒ
を意味する。三番目の質問は、電波を伝えた。編纂長は尋ねた。

「あの信号が人工的のものであることは確かだ。おっしゃるがために
は、あなた自身から寄せられた知識がメッセーシ、そのことを意味する
かもしれないという可能性をマセヴィッチ教授が認めている。あなた
は同意しますか？」回答が返される前に、編纂長は沈黙が続いた。「
その考え方には非難の余地はありません」と海外隊長は答えたのである。
続いて彼は、マセヴィッチ教授の質問に「理知者連は、それとつけ加え
た。英語で書かれた可能性を認めたかどうかという別な質問に答えて
海外隊長は、自分で言う前に、海外隊長のバーナード・ラヴェル卿に相談
する必要があると述べた。彼が説明した理由は、彼らが空軍の計画と種
がつけられるのを望まなかったこととであった。この三番目の回答はた
ぶん三つのうちで最も意味深長なものであった。なぜなら編纂長はこの
異端視された問題に關してすべてを隠すことに最大の見直しを求め
た。この結論は、こればかりではないからである。空軍の計画に結びつけてはな
らないという懸念は、マセヴィッチ教授があの初的な通信は、金星から
送られたのかもしれないという可能性をかくも無難作に考えたとき、
英科学者連が驚いた理由を説明して行くと云ってよいであろう。
海外隊長がバーナード・ラヴェル卿と相談した後（たぶん次に云うべ

キ事柄について）、彼は編纂長の誤りのない考え方について先に言
及したことから逃れようとした。彼らは信号が、地上の電信局であった
という事にこれ以上確信はなかったのである。信号は必ずしもマンチエ
スターの近辺からではなく、実際にどこから来たのかもしれない。そ
れは今や、正体不明の状況になってしまった。マセヴィッチ教授の云
った言葉は何を意味しようとしたのかと尋ねてみると、教授の言葉は冗
談だったのだと云う。これは海外隊長が以前に云いさせたポイントで
ある。そして隊長は多くの話の合わぬ話を続けた。結局編纂長はあ
の通信が実際に大気圏外から来たのか、それともコントロール・カム・ハ
ーディーから来るのか疑問に包まれてしまった。その上、疑惑はなおも
信号が人工的すなわち知覚的であるという事に投げられたのである。ひ
よつとすると自然の要因によるものではないだろうか。

以このエピソードは多くの興味ある事を含んでいる。ジョドレル、バ
ンクの装置は世界で最もすぐれた、空のなかったものの一つである。そ
れは宇宙、特に遠距離の星々に關するわれわれの知識を拓ける手段とし
て建設された。マセヴィッチ教授とその同僚は失われた金星ロケットか
ら発信されたと思われる信号を聴くためにモスコウから遠く旅したので
ある。彼女がその信号を確信できなかったときでさえも、彼女はそれが
金星の近辺から来るという事実をなわも全く明らかに認めていた。彼女
の訪問のあいだ彼女の後に、通信は地上的なものだという不確かあり得
たとわれわれは果して信じてよいものだろうか。もし地上的なものであ
るとすれば、その発信元はジョドレル、バンクの如き装置よりもっと
小型の機械で探知できたであろう。（通信員ならば数時間ほどの発信者
をつきとめることができたであろう。）もしアマチュア無線家、がその信
号の発本人であるとするなら、マセヴィッチ教授はモスコウからの遠く

キ様が實際に必要なものであつたかどうかを考えたであらう。しかし彼女は今も羨しそうで、しかもおぼせの冗談を気にしてはいないように見える。この冗談は英國へ来る大抵のソ連の役人のいつもの習性のことでは違つて、執拗なべき変りよつてゐる。

ところでシヨドレル・バンクの博學者運の態度である。彼らは田舎と蘭地するほどの絶えまなし恐怖のなかに生きてゐるにちがひない。この運命に耐けるよりもむしろ彼らはナンセンスを語り、以前に云つた事柄を否定したりするほうを好んでゐる。これは誰かが彼らに田舎クアンになつてもらいといふのではない。ただ彼らがつべてを知つていないといふことを認めさせるにはよいのだ。そうすれば、そんな物は存在しないのだといふたかりをするかわりに、人間は神聖を證明することができるといふ。(フライイング・ソーサー・レビュー誌一九二九年九月・十月号より)

以上の記事の本文はきつめてまわりくどい書き方がしてありますが、要するに、シヨドレル・バンク電液望遠鏡が拒えた微弱な電液はソ連の金屋ロケットからのものではなく、むしろ金屋自体から発せられたのかもしれないといふことをソ連の一流の天文学者が告白したにちがひない。英博學者、特にシヨドレル・バンクの博學者たちは言を左右してこのことを認めるようにはしないのはむづかしいが、その他の多くの博識によりますにシヨドレル・バンクは多数の重要な体験を持つてゐるようですが、内容は殆ど決まられてはいないと云われてゐます。もちろんどうあるべきでしよう。

x

x

一〇〇〇 雑 報

◎ 仕事は終つた——アダムスキは講演家としての仕事を終えた。彼は一九二一年九月廿日にサンフランシスコのダニエル・フライの主宰する、アンタスタイン・ゾーングの本館で宇宙哲學について語つたのが彼の公開講演の最後である。このことはルーシー・マクギニスが我々に知らせた言葉「アダムスキは本範圍に『現役』のリストから退きました。これは個人的な指導や著作に専心するためです」を要するものである。更にルーシーは云う。「私たちが進行するために必要な仕事は終つてしまつた。云いかえれば、必要な知識のすべては今やアダムスキによつて發表されてしまつたのであり、それをできる限り応用するか否かは我々次第であるといふことになる。(英田舎研究誌「オービット」一九二一年八月・九月・十月合併号より)

◎ 耶生杯はなかりた——真相は結局現われる。ウツリアムスン博士がグラストンベリーの聖杯井戸を発掘するといふ報告が流れてから数ヶ月になる。ウツリアムスン氏はその地で発掘を試みたけれども、この名高い土地の探索で彼を熱中させるような物は何もなかった事實が判明してゐる。ついでながら、この聖杯井戸に興味をもちかけたのは、W・テューダー・ポールの一連の著書、特に『沈黙の遺蹟』からお話しになることをおすすめする。(右に全じ)(註。グラストンベリーは英國南西部サマセット州の古都で人口五千、アリマテヤのミセフがイエスの聖杯を携えて来たといふ伝説の地です)

◎ スイスのサイレンス・グループ——「私の国

スイスではサイレンス・クループが正体を現わしませんでした。田舎問題はゼロにはっていません。私が自分の田舎写真コレクションを持って新聞社へ出入りすることは不可能なのです。私はそれを何度も試みました。今私は、私宛に電話をかけてくる人に写真を見せたり話をして聞かせたりして個人的に啓蒙活動を行なっています。というわけは、大抵の人は私をクレーンの野郎にまじっている女とみてゐるからです」(スイスの協力者ルウ・ツインシニターク女史からの十二月二十八日付私信)

◎ **金星とアダムスキ**——金星の大きさに用いる天文学者フィルソフの記事のなかに、一九五四年に私が訪問した際ジョージ・アダムスキが私に与えてくれた知識について注意すべき確証がある。そのとマヤツムスキは、地球の大きさに非常に似似た金星の呼吸できる大気を地球人がつきとめることができなかったのは、ただ観測法が十分でないからだと語った。彼が言った宇宙人たちの話によると、地球人がもし大気圏外へ観測装置を運ぶことに成功したならば(これは米国の成層圏探査や通常に成功した)、もっとほんどうの状態でわかり、大気の状態にわたって二つの海程が如何によく似ているかを知って驚くだろうという。また、金星の一面は地球のそれよりも少し短かくて、一般の気温は少々地球よりも暑いが、地球ほどに寒暖の差は激しくないと語ったという。またアダムスキは、有智な動物は腐ぐ、大気と層の或る傑出した層についてお話ししてくれた。私の記憶が正しいとすれば、これが金星人の長命の要因の一つだとアダムスキは語っていた。幸運に云うと、そのとき私はこれを少々変な話だと思つたが、回想すると、アダムスキはフィルソフの云うCO₂の厚い層のことを云つていたのである。

要するに、フィルソフの記事は驚くべき確証である。——デズモンド・レズリー(フライイング・ソーサー・レビュー誌一九六一年九月・十月号)

より)(註。フィルソフの記事というのは、フライイング・ソーサー・レビュー誌一九六一年七月・八月号に掲載された記事「生命の住居としての金星」を意味します。それによりますと、一九五九年十一月に米海軍とジョンズ・ホプキンス大学が協同して金星研究用の成層圏探査機を打ち上げたところ、赤外スペクトル写真が得られて、これは西暦二三の古い雲の上にあり水蒸気よりも、金星の雲の上にはもっと多量の水蒸気が存在することを確証し、それによって水の存在が確認されたことや、オハイオ州立大学のJ・クラウス博士が電波観測により金星の自転周期を二十二時間十七分と測定したことをあげ、またスペクトルで酸素が検出されぬ理由として太陽放射線による解離作用などを説明して、最後に「要約すると、現在のところ金星は『生命の住居』であるように見える。少なくとも地球と同様には適な状態であろう」と結んでいいます。これは純然たる科学的解説できわめて興味ある記事です)

① 二、三年前にチャクストン・ホールで或る会合があったとき、一人の紳士が前へ出て、二人の娘が或る夕方ワイルズの或る湖の近くで二人の金髪の男に出会った。彼らは娘たちを近くに停止していた雲霧の山魁型の機体の中へ招き入れた。彼の一人は数学がダメだったので、男たちが彼女に手ほどきをしてやったところ、三十分位して彼女は数学の天才になった。家へ帰ってから村人はこの娘たちを魔女と呼び始めた。と、(彼は(始めの紳士は)——どうも娘たちの友人の家族の者だろうか——娘たちをロンドンへ連れて行った。そして彼は、無教の数学を記憶する競技で二人の娘を買収する者がいれば一千ポンドを出すという。彼はど二かのステージでこの競技をやっている娘の写真を高く差出した。しかし会合が終わったとき、別の人から話しかけられたので、この男の姿をそれで見定まっている。——G・A・N・ステューヴンソン(目録より))

一 編集後記

◎ 先ず、各方面から寄せられた絶大な御支援と激励の辞に多く御礼を申し上げます。このご多忙をまわめておりましたため、才四号の発行が遅れて申訳ありません。今号はタイプ印刷にするつもりでしたが、どうも印刷費が捻出できず、まだガリ版にしました。無理押しをして一度や二度タイプ印刷にしてもあとが統かねば意味をなしませんので、その要を御諒承下さい。

◎ 今回でアダムスキの「訣別」の内容の紹介は終りますが、かねてから注文していた宇宙哲学が二月末か三月上旬に到着すると思っております。次号からはおそらくこの全訳を連載できると思っています。なお、これは翻訳アダブに「精神感」に加えて念本とし、「精神感」と宇宙哲学の「題して活字にしたい」というのが目下私の最大の念願の一つです。

◎ 翻訳した日本はまだ他にもあるのですが、時間的余裕がなくてどうにもなりません。現在は暇をみてクリシナムルティの「Commentary on Living」（生きるための助言）を読んでいますが、これは私がこれまでに読んだ万卷の求道書のなかで先づトップクラスに入るものと私はみています。思想的にはアダムスキとよく似ており、他人の哲学の境涯とははなれようです。要するに、他の思想に捉われないうで完全中立、全く自由な白紙の状態にまで自己を高めることの重要性を説いています。ゆえに、クリシナムルティ派とかアダムスキ派とかABCメンバードの成長の家信使といった一家一派の烙印を自ら身につけて喜ぶ「同化」の状態は誤りだとするクリシナムルティの言葉に私は深く考えさせられるのです。やはり、共通の課題が個人の思考力の飛躍の上昇をはたかせる要因である

としか思えません。
◎ 「どこにも悪魔などはいません。それはただ自分の心のなかに巣食っているだけだ」というアダムスキの哲学はどう考えをも更変をうかすものだろうかとしか私には思えないのです。その「心」という巨大な怪物を育ておいて、他人を非難攻撃することの野暮ったさ、イヤらしさは「間違い」というよりもむしろ本人自身の「悪魔的」存在を暴露するだけのことに思われます。一コンタクトマンが真実自己の体験が間違いのなり事で、人類にたいする責任であると確信しているのなら、何も他のコンタクトマンの悪意性を躍起になってせんざくしたり攻撃したりする必要は全くない筈のものを、感情的にどうなるような或る実例を私は非常に興味深く見るものです。

◎ 私に職業上、知能の低い特殊な少年たちを指導する仕事をやっていますが、この集団生活で私が感じることは、人間にとって「自ら考えよつとする力」が欠けているくらいに不幸なものはないということです。そして指導する側にとって必要なのは全く忍耐の一端に尽きるものであり、個人的説教などは一切意味をなしません。つまり彼らが体験によって生長するのを待つより他に方法はななのです。進化した遊星の人類が地球人を指導するにすればおぼろしく同様の状態にあるでしょう。しかしこの非行少年たちにも何かしら興味なるものがその底を流れているのを私は感じています。やはり「善悪」というものを持つべきでしょうか！

G・A・N JAPANESE スター No.4
編集・発行人 久保 田 八 郎
発行 所 鳥取県益田市益田町四丁目五番
日本 G・A・P
昭和三十七年三月十日発行 価格 五〇円